

ISSN 2433-7013

# 第5回日本リハビリテーション教育学会学術大会

大会テーマ：リハビリテーション教育・管理の質を考える

日時：平成31年1月5日（土）13:00-17:00

会場：国際医療福祉大学 小田原保健医療学部

大会長：堀本 ゆかり（国際医療福祉大学 小田原保健医療学部）

NPO:Rehabilitation Academic center (RAC)

The Society of Japan Rehabilitation Education

## プログラム

12:30-13:10 受付

13:10-13:15 開会の辞(丸山 仁司 会長)

13:15-14:45 特別講演

「質的研究入門」

国際医療福祉大学大学院

司会:国際医療福祉大学 小田原保健医療学部

磯野 真穂

堀本 ゆかり

15:00-15:50 一般演題 I

座長:国際医療福祉大学 福岡保健医療学部

森田 正治

演題1:臨床実習における作業療法学生の問題エピソード

—養成校教員および臨床実習指導者に対する Focus Group Interview からの分析—

社会医療法人若竹会 つくばセントラル病院 山下 優

演題2:失敗の価値観と学習について —失敗を通して成長を続けられるセラピストの育成を目指して—

市ケ尾病院 平野 偉与

演題3:作業療法士学生及び作業療法士の愛着スタイルと職業的アイデンティティに関するアンケート調査

東京福祉専門学校 リハビリテーション学部 泉 良太

演題4:静岡県内の理学療法士養成校における臨床評価実習前教育の実態調査

—実習前不安に着目して—

専門学校中央医療健康大学校 理学療法学科 高木 克典

演題5:長期実習を経験した学生のコミュニケーションスキルの変化について

上尾中央医療専門学校 理学療法学科 松崎 智幸

16:00-16:40 一般演題 II

座長:福岡国際医療福祉大学 大学設置準備室

柊 幸伸

演題6:診療参加型実習(Clinical Clerkship;CCS)が浸透するために必要な要件

—CCSが浸透し辛い理由の検証—

放射線第一病院 谷口 千明

演題7:理学療法士における労働環境や経験が社会的スキルと特性シャイネスに与える影響

医療法人社団 上総会 山之内病院 リハビリテーション課 富樫 美和子

演題8:国家試験対策取組に関する学生の満足度

国際医療福祉大学 保健医療学部 久保 晃

演題9:臨床で展開されているウイメンズヘルス理学療法および学部教育で必要な知識の調査

国際医療福祉大学 保健医療学部 渡邊 観世子

16:40-16:45 閉会(大会長:堀本 ゆかり)





















## ■ 演題9

臨床で展開されているウィメンズヘルス理学療法および学部教育で必要な知識の調査

渡邊 観世子<sup>1)</sup> 佐藤 珠江<sup>1)</sup> 久保 晃<sup>1)</sup>

1) 国際医療福祉大学 保健医療学部 理学療法学科

### 【目的】

本研究では学部教育において必要なウィメンズヘルス理学療法（WHPT）の知識を明らかにするために、臨床現場におけるWHPTの実施の実態および臨床の理学療法士が学部教育で必要と考える知識を調査した。

### 【方法】

本調査は本学関連病院の6病院および所属する2年目以上の理学療法士113名を対象とした。調査項目はFrancis(2012)を参考に、日本でのWHPTの対象となりうる、妊娠期、出産後、女性特有の疾患、加齢に伴うもの、女性アスリートの5つを大項目とした37症状を挙げた。これらの症状について、対象施設には平成29年度の理学療法実施件数、また対象者には学部教育で身に付ける知識としての重要性を4段階（「必須である」、「やや必須である」、「あまり必須でない」、「必須でない」）で回答してもらった。知識の重要性については、対象者の50%以上が「必須である」と回答した症状に着目し、さらに臨床経験の違いによる認識の差を明らかにするために、対象者を臨床経験5年以下と6年以上の群に分け、マン・ホイットニーU検定にて重要度の比較をおこなった。

なお本研究は所属機関および対象病院の倫理審査委員会の承認を得ている（17-Io-193, 17-S-25）。

### 【結果】

理学療法の実施については、6病院合わせて1,032件（全処方数の8.8%）であった。実施が最も多かった項目は女性特有の疾患（乳がん、子宮がん術後；896件）であり、最も少なかった項目は加齢に伴う症状（失禁、骨盤臓器脱；6件）であった。

知識の重要性については、89名（回収率：78.8%）の対象者のうち50%以上が「必須である」と回答した症状は、加齢に伴う症状である骨粗鬆症（82.0%）および失禁（52.9%）、出産後の腰痛・骨盤痛（53.9%）、女性特有の疾患（52.9%）であった。経験の違いによる比較では、女性特有の疾患である乳がんに伴う機能障害については、6年目以上よりも5年目以下の群において有意に必要性が高いと考えていた（ $U = 736.0$ ,  $p < .05$ ）。

### 【考察】

本学関連施設におけるWHPTは、主に女性特有の疾患（乳がんや子宮がん）に伴う機能障害に対して実施されていることが分かった。知識の重要性については、実施の実態の多さに関わらず、産後や加齢に伴う症状の重要性が高いと認識されているため、これらは女性特有の疾患と合わせて、学部教育で習得すべき知識と言える。乳がんに伴う機能障害については、経験年数が多い対象者よりも少ない対象者の方が学部教育での重要性を高く回答していたことから、臨床経験により知識や技術を習得すべき時期の認識が異なることが明らかとなった。

### 【謝辞】

本研究は平成30年度理学療法にかかわる研究助成（H30-A2）の助成を受けたものである。

第5回 日本リハビリテーション教育学会学術大会

---

---

会長 丸山 仁司(理学療法士)

委員 堀本ゆかり(理学療法士)  
柗 幸伸 (理学療法士)  
鈴木 真生(言語聴覚士)  
寺田 佳孝(教育学)  
小野田 公(理学療法士)  
鈴木 啓介(理学療法士)  
佐藤 珠江(理学療法士)  
和田 三幸(理学療法士)  
後藤 純信(医師)

---

---

---

---

編集:NPO 法人リハビリテーション学術センター  
日本リハビリテーション教育学会

〒173-0004  
東京都板橋区板橋 1-11-7-901  
日本リハビリテーション教育学会 事務局

2019年1月5日発行

URL<http://rehaac.org/professional.html>

---

---